

書誌から見た「オタク」研究

増補版（前編）

佐々木 隆

目次

前編

プロローグ	xvii
序 「オタク」とは何か	1
1 オタク前史	1
2 オタクの誕生と発見—中森明夫『『おたく』研究 街には『おたく』がいっぱい』(1983)	7
3 幼女連続誘拐殺人事件の影響	14
4 オタクの定義	17
(1) 新村出編『広辞苑』の「オタク」	18
(2) 松村明編『大辞林』の「オタク」	22
(3) 清水均編『現代用語の基礎知識』の「オタク」	24
(4) 国語辞典に見られる「オタク」	36
(5) 様々な「オタク」の定義	39
(6) 英語辞典類の“otaku”	47
(7) “otaku”の定義	55
(8) 「オタク」の定義のまとめ	58
5 「おたく」と「オタク」と「ヲタク」	61
6 オタクの気質	67
7 「オタク文化」とは何か	72
(1) 岡田斗司夫『オタク学入門』(1996)	73
(2) 岡田斗司夫「アニメは現代の浮世絵」(1997)	78
(3) 東浩紀『動物化するポストモダン』(2001)	79
(4) 森川嘉一郎『趣都の誕生』(2003)	84
(5) 本田透『電波男』(2005)	85
(6) 村上隆『『脱力』に宿る芸術の力 おたくの起源たどる『リトルボーイ』展 NYで異例のヒ	

	ット」(2005)	87
(7)	ササキバラ・ゴウ編『「戦時下」のおたく』 (2005)	90
(8)	「オタク文化の大攻勢 アニメ・お笑い・スシ 今ニッポンがかっこいい！」(2006)	95
(9)	檜村愛子「日本の『オタク文化』はなぜ世界的 なものとなったのか」(2007)	97
(10)	竹熊健太郎・伊藤剛・森川嘉一郎「オタク文化 の現在(7) 座談会 オタク・サブカル・サ ブカルチャー」(2007)	105
(11)	『國文学』(特集:「萌え」の正体)(第53巻 第16号、2008)	108
(12)	吉本たいまつ『おたくの起源』(2009)	109
(13)	菊地成孔・大谷能生『アフロ・ディズニー』 (2009)	110
(14)	前島賢『セカイ系とは何か』(2010)	113
(15)	出原健「相同性—『オタク文化』の場合」 (2011)	113
(16)	辻泉「オタクの快樂」(2012)	116
(17)	宮台真司「最終章 オタクの『出現』から30 年で理解は進んだか？」(2014)	117
(18)	羽生雄毅「日本発祥の『オタク文化』がインタ ーネットを席卷している」(2014)	118
(19)	長山靖生『「世代」の正体』(2014)	125
(20)	永田大輔「コンテンツ消費におけるオタク文化 の独自性の形成過程」(2015)	127
(21)	佐々木隆『ことばとオタク文化』(2021)	132
(22)	オタク文化の整理	133
8	オタクの変遷	136
	(1) 世代論	136

(2) オタク 5 世代	1 3 8
(3) オタク第 1 世代 1960 年前後生まれの世代	1 4 0
(4) オタク第 2 世代 1970 年前後生まれ世代	1 4 2
(5) オタク第 3 世代 1980 年前後生まれ世代	1 4 9
(6) オタク第 4 世代 1990 年前後生まれ世代	1 5 2
(7) オタク第 5 世代 2000 年前後生まれ世代	1 5 4
9 オタク・オタク文化研究	1 5 8
(1) 大塚英志『物語消費論』(1989)	1 5 9
(2) 『おたくの本』(別冊宝島 104 号)(1989)	1 6 3
(3) 太田出版編『Mの世代』(1989)	1 6 5
(4) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』 (1991)	1 6 9
(5) 宅八郎『イカす!おたく天国』(1991)	1 7 3
(6) 浅羽通明『天使の王国』(1991)	1 7 5
(7) 島田裕巳「オタク国家・日本」(1991)	1 7 9
(8) アクロス編集室編『ポップ・コミュニケーション全書』(1992)	1 8 3
(9) Annalee Newitz “Anime Otaku: Japanese Animation Fans Outside Japan” (1994)	1 8 8
(10) 大澤真幸『電子メディア論』(1995)	1 9 2
(11) 辻大介「若者におけるコミュニケーション様 式変化」(1996)	1 9 3
(12) 岡田斗司夫『オタク学入門』(1996)	1 9 5
(13) Mark Schilling. <i>The Encyclopedia of Japanese Pop Culture</i> (1997)	1 9 9
(14) 岡田斗司夫「新『オタク文化』講座」(1997)	1 9 9
(15) 岡田斗司夫・山本弘・田中公平『封印』(1997)	2 0 2
(16) おたつきい佐々木『フッ完全おたくマニュアル』(1997)	2 0 4
(17) 間庭充『若者犯罪の社会文化史』(1997)	2 1 2

(18) 岡田斗司夫編『国際おたく大学』(1998)	2 1 5
(19) 石井久雄『「おたく」のコスモロジー』(1999)	2 3 6
(20) 圓田浩二「オタク的コミュニケーション「普通 っぽい」アイドルと三つの距離」(1998)	2 3 8
(21) 岡田斗司夫『オタクの迷い道』(1999)	2 4 1
(22) Sharon Kinsella. <i>Adult Manga</i> (2000)	2 4 4
(23) 岡田斗司夫・山本宏・田中公平『回収』(2000)	2 4 5
(24) 斎藤環『戦闘美少女の精神分析』(2000)	2 4 9
(25) 岡田斗司夫・山本宏・田中公平『絶版』(2000)	2 5 4
(26) 太田啓之「オタクの悲劇」(2000)	2 5 9
(27) 西井一夫編『社会主義の終焉』(2000)	2 6 3
(28) 岡田斗司夫・山本弘他『ヨイコ』(2001)	2 6 9
(29) 大塚英志『定本物語消費論』(2001)	2 7 1
(30) 東浩紀『動物化するポストモダン』(2001)	2 7 3
(31) 岡田斗司夫・山本弘他『ナカヨシ』(2002)	2 8 1
(32) 岡田斗司夫・山本弘他『メバエ』(2002)	2 8 4
(33) 森川嘉一郎『趣都の誕生』(2003)	2 8 7
(34) 村瀬ひろみ「オタクというオーディエンス」 (2003)	2 9 1
(35) 大塚英志『「おたく」の精神史—1980年代 論』(2004)	2 9 4
(36) 国際交流基金／森川嘉一郎編『おたく：人 格＝空間＝都市』(2004)	2 9 7
(37) 大塚英志『物語消滅論』(2004)	3 0 3
(38) Marc Steinberg “Otaku consumption, superflat art and the return to Edo” (2004)	3 0 8
(39) 相田美穂「現代日本におけるコミュニケーショ ンの変容—おたくという社会現象を通して」 (2004)	3 1 3
(40) 村上隆編『リトルボーイ』(2005)	3 1 5

- (41) 稲葉振一郎『オタクの遺伝子』(2005) 3 1 8
- (42) 本田透『電波男』(2005) 3 2 0
- (43) 守岡太郎「オタク市場マーケティング」(2005) 3 2 4
- (44) 『ユリイカ』(総特集オタクVSサブカル!)
(第37巻第9号)(2005) 3 2 7
- (45) 相田美穂「おたくをめぐる言説の構成:1983年
~2005年サブカルチャー史」(2005) 3 2 9
- (46) 野村総合研究所オタク市場予想チーム『オタ
ク市場の研究』(2005) 3 3 6
- (47) オタク文化研究会『オタク用語の基礎知識』
(2006) 3 3 9
- (48) 大澤真幸「オタクという謎」(2006) 3 4 1
- (49) 森川嘉一郎・三浦展「オタクと高速道路」(2006) 3 4 4
- (50) 牟田武生『ジャパंकール』(2006) 3 4 7
- (51) パトリック・マシアス/町山智浩訳『オタク・
イン・USA』(2006) 3 4 9
- (52) 井上努「『楽しさ』としての観光経験の表象に
関する考察」(2006) 3 5 6
- (53) Ken Gelder. *Subcultures*(2007) 3 5 9
- (54) 神澤孝宣「二極化するキャラクター消費」
(2007) 3 6 0
- (55) 歐陽宇亮「『オタク』とは何か—オタク文化の
多様性とオタク・イメージの貧困性との矛盾を
切り口にして」(2007) 3 6 2
- (56) 井上努「旅行経験に基づく<観光オタク>の
創作活動と表象」(2007) 3 6 5
- (57) Joseph Britton “Japan-Otacool Nation Trends
of Japanese Otaku Youth” (2007) 3 6 7
- (58) 東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生』(2007) 3 7 1
- (59) 岡田斗司夫・唐沢俊一『オタク論!』(2007) 3 7 7

(60) 歌田明弘「日本的なインターネット文化の誕生を めぐって」(2007)	379
注	381

.....

中編 オタク・オタク文化研究 (前編の続き)

(61) 『2008 オタク産業白書』(2007)	413
(62) ヒロヤス・カイ『オタクの考察』(2008)	416
(63) 岡田斗司夫『オタクはすでに死んでいる』 (2008)	421
(64) 森永卓郎・岡田斗司夫『オタクに未来はあるの か！？』(2008)	435
(65) 大塚英志・東浩紀『リアルのゆくえ』(2008)	447
(66) 早川清他編著『メイド喫茶で会いましょう』 (2008)	450
(67) 江藤茂博『オタク文化と蔓延する「ニセモノ」 ビジネス』(2008)	451
(68) 松谷創一郎「<オタク問題>の四半世紀」 (2008)	452
(69) 『國文学』(特集:「萌え」の正体)(2008)	460
(70) 菊池聡「『おたく』ステレオタイプの変遷と 秋葉原ブランド」(2008)	463
(71) Renato Rivera “The Otaku in Transition” (2009)	467
(72) 清水信一『ル・オタク フランスおたく物 語』(2009)	469
(73) 吉本たいまつ『おたくの起源』(2009)	472
(74) 山中智省「『おたく』誕生—『漫画ブリッ コ』の言説力学を中心に—」(2009)	479
(75) 田川隆博「オタク分析の方向性」(2009)	481

- (76) 金田一「乙」彦・編『オタク語事典』(2009) 4 8 6
- (77) 藤原実『現代オタク用語の基礎知識』(2009) 4 8 8
- (78) 榎本秋編『オタクの面白いほどわかる本』
(2009) 4 8 9
- (79) 折原由梨「おたくの消費行動の先進性について」(2009) 4 9 2
- (80) Patrick W. Galbraith. *The Otaku Encyclopedia* (2009) 4 9 4
- (81) 浅野智彦「コミュニケーションの失敗／自閉するアイデンティティ」(2009) 4 9 5
- (82) 柳享英『OTACOOOL WORLD OTAKU ROOMS』(2009) 4 9 6
- (83) William M. Tsutsui. *Japanese Popular Culture and Globalization* (2010) 4 9 8
- (84) 前島賢『セカイ系とは何か』(2010) 4 9 8
- (85) 脇坂幸恵『幻根と幻蓄の精神 “オタク” 女性たちとなりきりメールについて』(2010) 5 0 1
- (86) 鏡裕之『非実在青少年論』(2010) 5 0 4
- (87) 暮沢剛巳『キャラクター文化入門』(2010) 5 1 2
- (88) 池田太臣「オタクの“消滅”～オタクイメージの変遷」(2011) 5 1 6
- (89) 安田誠『オタクのリアル』(2011) 5 2 4
- (90) 佐々木隆「気になる言葉⑩ オタク／オタク文化」(2011) 5 2 6
- (91) Patrick W. Galbraith. *Otaku Spaces* (2012) 5 2 7
- (92) Mizuko Ito, Daisuke Okabe, and Izumi Tsuji, editors. *Fandom Unbound: Otaku Culture in a Connected World* (2012) 5 3 0
- (93) Patrick William Galbraith. *Becoming-otaku:*

<i>men, girls and movement in Akihabara</i> (2012)	5 4 1
(94) 佐々木隆「大学教育とオタク文化」(2012)	5 4 4
(95) 本郷和人「東大教授、おたく、駆け出しのファンとして…おたく文化を許容する国に咲いた大輪のひまわり」(2012)	5 4 7
(96) 村上隆／美術手帖編『村上隆完全読本美術手帖記事 1992-2012』(2012)	5 5 2
(97) 辻泉「アニメーション・マニア、オタクという幻想」(2012)	5 5 8
(98) 佐々木隆「気になる言葉⑬ オタク文化系の大学」(2012)	5 6 0
(99) 難波功士・濱野智史「“ヤンキー”と“オタク”について語り尽くす」(2012)	5 6 2
(100) 嶽本野ばら『もえいぬ』(2012)	5 6 4
(101) 辻泉「オタクの現在を考える」(2012)	5 6 7
(102) 佐々木隆『オタク文化論』(2012)	5 6 8
(103) 大塚英志『物語消費論改』(2012)	5 7 1
(104) 鈴木隆之『『オタク』の履歴書—『オタク』の文化人類学研究のための試論—』(2013)	5 7 5
(105) Joff Peter Norman Bradley “Is the Otaku Becoming Overman?” (2013)	5 8 2
(106) 浅野智彦『「若者」とは誰か』(2013)	5 8 6
(107) 寺尾幸紘『オタクの心をつかめ』(2013)	5 9 0
(108) 薄葉彬貢『世界アニメ・マンガ消費行動レポート』(2014)	5 9 1
(109) 加藤裕康「若者論とオタク論の系譜」(2014)	5 9 2
(110) 渡邊秀司「オタクの言説—外部との『緊張感』を考えるために—」(2014)	5 9 6

- (111) 今井信治『メディア空間における「場所」と共同性』：オタク文化をめぐる宗教社会学的研究』(2014) 602
- (112) 宮台真司監修／辻泉・岡部大介・伊藤瑞子編『オタク的想像力のリミット』(2014) 607
- (113) Patrick W. Galbraith, Thiam Huat Kam, and Björn-Ole Kamm, editors. *Debating Otaku in Contemporary Japan* (2015) 613
- (114) しめすへん『現代オタク論』(2015) 617
- (115) 檀朋美『「関係的な生きづらさ」をオタクの間関係から捉える試みー『コミュニケーション不全症候群』の視点からー』(2015) 619
- (116) 永山薫「1983年～オタク文化史クルージング～」(2015) 622
- (117) 原田曜平『新・オタク経済』(2015) 226
- (118) 片瀬一男『若者の戦後史』(2015) 234
- (119) 佐々木隆「TV放送のオタク文化への影響」(2015) 638
- (120) 菊地映輝「オタク化するお台場」(2015) 640
- (121) 羽生雄毅『OTAKU エリート』(2016) 642
- (122) 中島渉・松原歆・中津野俊太・中村雅子「『迷惑行為』から見えるオタクの境界デザイン」(2016) 644
- (123) 山岡重行『腐女子の心理学』(2016) 647
- (124) 王芳瀟「『オタク論』と系譜学」(2016) 649
- (125) 佐々木隆『ポップカルチャー論』(2016) 653
- (126) 南隆太「AKBに観るヤンキー文化とオタク文化の接合関係について」(2017) 654
- (127) Philip Seaton and Takayoshi Yamamura, editors. *Japanese Popular Culture and*

<i>Contents Tourism</i> (2017)	6 5 6
(128) 辻泉「オタクたちの変貌」(2017)	6 5 7
(129) 王芳瀟『オタク的なアイデンティティと 欲望』(2017)	6 6 0
(130) 北田暁大・解体研編『社会にとって趣味とは 何か』(2017)	6 6 3
(131) 大泉実成『オタクとは何か?』(2017)	6 6 7
(132) 株式会社ライブ編『二次元世界に強くなる現代 オタクの基礎知識』(2017)	6 7 0
(133) Howexpert Press and Jessica Roar. <i>Otaku 101: An Introductory Guide to Learning About the Otaku Pop Culture, Anime, Manga, and More!</i> (2018)	6 7 2
(134) 渡邊秀司「『優しい関係』の展開について」 (2018)	6 7 3
(135) 牧野宏紀「学級内における対抗文化としての 『オタク文化』」(2018)	6 7 5
(136) 今井真治『オタク文化と宗教の臨界』(2018)	6 7 7
(137) 宇野常寛『若い読者のためのサブカルチャー 論講義録』(2018)	6 7 8
(138) 平成オタク研究会編『図解 平成オタク 30 年史』(2018)	6 7 9
(139) 佐々木隆『ポップカルチャーとオタク文化 の微妙な関係』(2018)	6 8 1
(140) 山上尚彦・斎藤環・森田展彰・大谷保和「オ タク的消費行動と心理不適応の関連の検討」 (2018)	6 8 5
(141) Patrick W. Galbraith. <i>Otaku and the Struggle for Imagination in Japan</i> (2019)	6 8 8
(142) 松下戦具「広義化した『オタク』の整理—	

オタクファッションを考察するために」 (2019)	6 9 1
(143) 小林義寛『『文化 (the cultural)』の文脈化 —あるいは雑種化と土着化—』(2019)	6 9 3
(144) 佐々木隆『ポップカルチャーとオタク文化 の微妙な関係 増補版』(2019)	6 9 4
(145) はちこ『中華オタク用語辞典』(2019)	6 9 5
(146) 菊地映輝「都市空間におけるサブカルチャー の政策的振興に関する研究—文化装置論から 見るコスプレ文化」(2019)	6 9 6
(147) 佐々木隆『書誌から見た「オタク」研究』 (2019)	7 0 1
(148) 中山淳雄『オタク経済圏創世記』(2019)	7 0 5
(149) 張瑋容「日本のポップカルチャーとジェン ダー研究—オタク文化を中心に」(2020)	7 0 7
(150) 亀山康夫「オタク文化の専門研究機関の発 足とその効果：世界オタク研究所の活動か ら」(2020)	7 1 0
(151) 山田智之「オタクの職業観に関わる研究」 (2020)	7 1 4
(152) 高岡治樹・菊地学・尹成秀「オタクはどの ような印象をもたれているのか？—オタク カテゴリと印象との相互関連性の検討」(2020)	7 1 8
(153) 株式会社ライブ編『365 日で知る現代オタ クの教養』(2020)	7 2 1
(154) 佐々木隆『ポップカルチャーとオタク文化 の微妙な関係 追加増補版』(2020)	7 2 3
(155) 山岡重行編『サブカルチャーの心理学』(2020)	7 2 4
(156) オタクを研究するとはどういうことか	7 3 3
10 気になる本	7 3 5

(1) ヴェルナー・ゾンバルト／金森誠也訳 『恋愛とぜいたくと資本主義 (1969)』	7 3 5
(2) 稲村博『機械親和性対人困難症』 (1986)	7 3 8
(3) 成田康昭『「高感度人間」を解読する』 (1986)	7 4 0
(4) 岡田斗司夫『ぼくたちの洗脳社会』 (1995)	7 4 5
(5) 宇田川岳夫『フリンジ・カルチャー』 (1998)	7 5 1
(6) ト学会編『トンデモ本』シリーズ	7 5 3
(7) 斎藤環『博士の奇妙な成熟』 (2010)	7 5 8
(8) 浅野智彦『趣味縁からはじめる社会参加』 (2011)	7 6 1
(9) 初見健一『ぼくらの昭和オカルト大百科』 (2012)	7 6 5
注	7 6 6

.....
後編

11 腐女子・BL・LGBTQ 研究	7 8 8
(1) 「腐女子」の定義	7 8 8
(2) 「LGBTQ」とは	7 9 4
(3) 荷宮和子『おたく少女の経済学』 (1995)	7 9 7
(4) 岡田斗司夫編『国際おたく大学』 (1998)	8 0 0
(5) 西村マリ『アニパロとヤオイ』 (2002)	8 0 3
(6) 有吉由香・杉浦由美子「女オタク 萌える 女オタク」 (2005)	8 0 6
(7) 『ユリイカ』(総特集◎文化系女子カタログ) (第 37 巻第 12 号) (2005)	8 0 9
(8) 山本文子&BL サポーターズ『やっぱりボーイ ズラブが好き』 (2005)	8 1 3
(9) 杉浦由美子『オタク女子研究』 (2006)	8 1 5
(10) 杉浦由美子『腐女子化する世界』 (2006)	8 1 8

- (11) 『ユリイカ』(総特集◎腐女子マンガ体系)
(第39巻第7号)(2007) 820
- (12) 『ユリイカ』(総特集◎BLスタディーズ)
(第39巻第16号)(2007) 823
- (13) 岡田斗司夫『オタクはすでに死んでいる』
(2008) 825
- (14) 石田美紀『密やかな教育—くよおい・ボーイズラブ>前史』(2008) 826
- (15) 堀あきこ『欲望のコード』(2009) 829
- (16) 杉浦由美子『101人の腐女子とイケメン王子』
(2009) 831
- (17) 河口和也・風間孝『同性愛と異性愛』(2010) 834
- (18) 嶽本野ばら『もえいぬ』(2012) 836
- (19) 桐生操『世界ボーイズラブ大全』(2012) 838
- (20) かつくら編集部『腐女子語事典』(2013) 840
- (21) 石田喜美+岡部大介『『少女文化』の中の腐女子』(2014) 842
- (22) 『美術手帖』(特集:ボーイズラブ)(第66巻
第1016号)(2014) 844
- (23) 横山芙美編『ユリイカ』(特集:百合文化の
現在)(第46巻第15号)(2014) 849
- (24) 溝口彰子『BL進化論』(2015) 852
- (25) 西村マリ『BLカルチャー論』(2015) 855
- (26) 山岡重行『腐女子の心理学』(2016) 858
- (27) 溝口彰子『BL進化論 [対話篇]』(2017) 861
- (28) サンキュータツオ・春日太一『ボクたちのBL
論』(2018) 867
- (29) 山岡重行『腐女子の心理学2』(2019) 869
- (30) はちこ『中華オタク用語辞典』(2019) 872
- (31) 伊藤氏貴『同性愛文学の系譜』(2020) 873

(32) ふちのやまい編『「百合映画」完全ガイド』 (2020)	875
(33) 堀あきこ・守如子編『BLの教科書』(2020)	876
(34) 山岡重行編『サブカルチャーの心理学』(2020)	880
(35) 明石陽介編『ユリイカ』(特集：女オタク の現在—押しとわたし) (第52巻第11号) (2020)	882
(36) 腐女子小史	886
12 オタク・腐女子・LGBTの映画・ドラマ	888
(1) 那須博之監督『セーラー服百合族』(1983)	888
(2) 金子修介監督『OL百合族19歳』(1984)	890
(3) 橋口亮輔監督『夕辺の秘密』(1989)	891
(4) もりたけし監督『おたくのビデオ』(1991)	891
(5) 山田大樹監督『七人のオタク』(1992)	893
(6) 橋口亮輔監督『二十才の微熱』(1993)	894
(7) 井沢満脚本／細野英延・五木田竜一演出 『同窓会』(1993)	896
(8) 橋口亮輔監督『渚のシドバッド』(1995)	897
(9) 中島哲也監督『下妻物語』(2004)	899
(10) 渡辺直美監督『青春801あり!』(2004)	900
(11) 村上正典監督『電車男』(2005)	900
(12) 三池崇史監督『46億円の恋』(2006)	901
(13) 兼重淳監督『腐女子彼女。』(2009)	902
(14) 橋口亮輔監督『ハッシュ!』(2010)	904
(15) 川村泰祐監督『海月姫』(2014)	905
(16) 右田昌万監督『地下の中心で愛を叫ぶ!』 (2014)	905
(17) ドン・ホール、クリス・ウィリアムズ監督 『ベイマックス』(2014)	905
(18) 天野千尋監督『どうしても触れたくない』	

(2014)	9 0 6
(19) 佐藤真人監督『電波教師』(2015)	9 0 7
(20) 村山和也監督『墮ちる』(2016)	9 0 8
(21) 豊島圭介監督『ヒーローマニア生活』(2016)	9 0 9
(22) ピーター・ハッチングス監督『オタクレボリ ューション』(2017)	9 1 0
(23) 徳尾浩司脚本『おっさんずラブ』(2018)	9 1 0
(24) 英勉監督『3D彼女 リアルガール』 (2018)	9 1 4
(25) 松本優作監督『Noise』(2019)	9 1 5
(26) 盆子原誠・大嶋慧介・上田明子・野田雄介 演出『腐女子、うっかりゲイに告(コク) る。』(2019)	9 1 6
(27) 加藤拓也脚本/狩山俊輔・水野格・茂山佳 則『俺のスカート、どこ行った?』(2019)	9 1 9
(28) 福田雄一監督『ヲタクに恋は難しい』(2020)	9 2 0
(29) 平沼紀久監督『私がモテてどうすんだ』 (2020)	9 2 1
(30) 行定勲監督『窮鼠はチーズの夢を見る』 (2020)	9 2 2
(31) 今泉力哉監督『あの頃。』(2021)	9 2 3
13 気になるイベント・TV番組	9 2 4
(1) コミックマーケット(1975-)	9 2 5
(2) 『カルトQ』(1991-1993)	9 3 6
(3) 『TVチャンピオン』(1992-2006)	9 3 7
(4) 『開運!なんでも鑑定団』(1994-)	9 3 8
(5) 日本オタク大賞(2001-)	9 3 8
(6) 『マツコの知らない世界』(2011-)	9 4 0
(7) ニコニコ超会議(2012-)	9 4 0
(8) 『激レアさんを連れて来た。』(2017-)	9 4 3

	(9) 『サンドウィッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん』 (2019-)	944
注		945
エピローグ		957

プロローグ

本書は『書誌から見た「オタク」研究』（多生堂、2019年10月）の増補版である。

もももとは平成も終わり新しい時代を迎え、昭和半ばから平成を越え、新時代を迎えて若者文化に取り組んできた研究者のひとりとしてまとめたものであるが、さらに見直しを進めるとともに、新しい資料を追加した。すべてを取り上げることはできていない。書誌は出来上がった瞬間から古くなるという終りのない宿命を背負っている。しかし、類書がないだけに、この分野を研究する者への貢献はあるものと信じている。

このオタク研究に関わらず、書名に「オタク」となくてもオタク論・オタク研究となっているものやオタク研究のものが含まれていることがある。そのため、現物を手に取り目次を確認すると同時に内容を読みながら精査するしかないのである。このため特に「オタク研究」も「オタク・オタク文化研究」と改め、扱う文献も75文献から2倍以上の155文献へ、「腐女子研究」も「腐女子・BL・LGBTQ」と改め、18文献から33文献へ、「オタク・腐女子・LGBTの映画・ドラマ」も「オタク・腐女子・LGBTQのアニメ・映画・ドラマ」と改め、17作品から31作品へと増補した。また、「気になるTV番組」も「気になるイベント・TV番組」とし、扱う番組等も4から9へと増補した。他にも構成上の見直しを行った。新しく設けたものとして「7 『オタク文化』とは」も下位項目をもうけた。「10 気になる本」の8冊と1つのシリーズは直接オタク研究をしているものではないが、オタク研究の中で扱われるPC等の機械類の親和性とオタク産業、特に「萌え」における恋愛と経済の問題、カルト的な内容を扱っていることで関係してくるため、取り上げてみた。

初版では反映できなかった文献も多数ある。しかし、何をどこまで取り上げるかは難しい。できるだけ入手可能なものを中心に取り上げた。増補を積極的に行った関係で頁数が増加したため、前編・中編・後編と3分冊となった。これまでのもので抜けていたものや新たに入手できたもの、出版されたものなど、自転車操業的な面もあるが、できるだけ反映させようとした結果

でこうなってしまった。前編は「9 オタク・オタク文化研究」の60まで、中編は「9 オタク・オタク文化研究」の61以降で、後編は「11 腐女子・BL・LGBTQ」からとした。とくに同性愛関係については、TVドラマ、映画などでこれまで以上に発表されているだけに注目しておきたい。

なお、文中の引用では読みやすさを重視したため、引用等も支障がない限り、漢数字のものを算用数字で表記している。また、時期がきたら再び改訂等は積極的に行いたい。

著 者